

「金取温泉」

藤田精良氏「金取金山と金取温泉」から

「金取」という土地の名前を考えましょう。平成の今から数えて、さかのぼること八百年以上も前のことです。そのころは、東北地方を奥州・藤原氏が治めており、ものすごい力をもっていました。その東北を治める力の大きさが、ここ三陸地方の海岸線沿いでとれるばく大な量の金だったと言われています。そのために、平成の今でも、ここ面瀬の地にも金取りと関係の深い地名が残っているのです。「金取」などという土地の名は読んで字のごとし、「金をとる」ということでしょう。何百年前とはいえ、この面瀬でどれほど金がとれたのでしょうか。

ところで、金とはどんな金属なのでしょう。地球上のどんなところで多くとれるのでしょうか。

金は人間がはじめて使った金属といわれています。そのくらい、土や岩の中から、かたまりとしてとれました。砂金などは川の底にあったというのですから、すごいことです。

でも、量はすごくすくすくないのです。今までに地球上でとられた金の量は、オリンピックで使うプールで計ると、たった三杯分しかありません。鉄や銅はオリンピックプールではかったら、ほんの一年間で何百万杯分です。ですからものすごく高価で、大事な金属なのです。

金は黄金に輝く美しいものというだけではありません。今のパソコンや電気自動車などの部品に使われるくらい私達の生活に欠かせない金属です。レアアースなども呼ばれています。金は一度細かい細かいものにされると(イオンといいます。)かたまりの時はちがって、ものすごい毒になったりします。逆に、なかなか治らない病気を治すはたらきもあるということです。このようなことは、科学が進歩したこのころになって、やっと分かってきたことです。

世界で見ると金は南アフリカで多くとれています。どんなところかというところ、何億年から何十億年前の古い土地からとれるそうです。昔から多くの金をとれたこの三陸地方も、何億年も前からこの土地であると言えます。その証拠に、気仙沼市の月立では、何億年も前の化石がとれていますよね。

前置きが長くなりました。秋田は大昔から大変に鉱山の多いところなんです。今から九百年も昔から金をとれたと記録にあります。また、江戸時代は銅がたくさんとれ



ました。ですから金をほる名人がたくさんいたのです。当然、今の気仙沼、松崎の金取の地にも、金をとるために秋田から多くの職人や名人が集まってきました。体がでかく毛深い職人たちを率いるのは、そんな男たちよりもさらに腕っ節が強く、心の方もテコでも動かないくらい強い頭領です。なにせ金役人は金のひとかけから見逃さない鮎貝家の家来です。頭領が職人たちの金のちよるまかしを見逃したりしたらどんなに重い罰が待っているのか。思っただけでも怖いくらいです。ですから、職人だけでなく頭領も、心と身体を使い切ってしまうのです。

家族と共に、秋田から金取に来ていた頭領も、かなり年をとりました。金堀りの頭領はほかの者にゆずって、のんびりと家族とともにすごそうと思っていた矢先のことでした。頭領は重い病にかかりました。身体がかたくなって節々が痛くて痛くてしょうがありません。何日も何日も寝込んでしまいました。妻と息子はいろいろな薬を求めては父にのませましたが、良くなるどころか、布団の中で痛い痛いと言ひばかりでした。



そのように困っていた時です。この頭領と一緒に秋田から金取に来た職人が、頭領の病を聞きつけて、頭領の家を訪ねて来ました。職人が言うには、「金堀りの洞窟にわく水を、風呂の湯としてあたためて、それで身体を温めてみなさい。おらのおやじも、金堀りで体が痛くなると、そのようにしていたものだ。ただし、わき水は金がたくさんとれた洞窟にかぎる。」

と。妻と息子は家からかなりはなれた山奥をたずねました。大昔、目もくらむほど金をとれたという洞窟まで、何回も何回も往復して、わき水をくみ、運びました。そして、お湯をわかして父を風呂に入れました。するとどうでしょう。わき水のお湯が虹色に輝くのです。不思議なことです。こうして、何日も何日も虹色に輝く洞窟のお湯につかった頭領は、何と、体の痛みがどんどんとれて、もどおりになったのです。



こんなことがあってから、金掘り職人達は、もと頭領の家の風呂に入らせてもらうようになりました。みんな口を合わせ

「疲れがとれる。心が落ち着く。気持ちがよくなる。」
とありがたがるのです。

妻と息子は、あの洞窟からわく水のことには誰にも言いませんでした。そして「金取温泉」として商売を始めたのです。温泉は金取の金が出なくなって閉山するまで、金掘り職人で繁盛しました。

このお話は、金という金属が不思議な力を持っていることを伝えているような気がしてなりません。

